



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	文化使節：日本におけるラフカディオ・ハーンとパーシヴァル・ローウェル
Author(s)	[講演]カール・ドーソン (Carl Dawson) [通訳・翻訳]黒澤 一晃 (Kazuaki Kurozawa)
Citation	研究紀要 (SHOIN REVIEW), 第 36 号 : 1-24
Issue Date	1995
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

文化使節——日本におけるラフカディオ・ ハーンとパーシヴァル・ローウェル

〔講 演〕 カール・ドーソン

〔通訳・翻訳〕 黒 沢 一 晃

松蔭女子学院大学に交換教授として招かれ教鞭を取る機会に恵まれて以来、すでに6年の歳月が流れました。そしてまた私が、ラフカディオ・ハーンの生涯ならびにその著作に関心を抱き始めてからも、もう6年以上になります。従って、今回の神戸松蔭女子学院大学再訪は、およそ100年前に神戸でジャーナリストとしての偉大な足跡を残した、かの魅力に溢るる文化使節としてのラフカディオ・ハーンの事績を再吟味するための訪問であるとともに、旧友の皆さまに再会の喜びと感謝の念をお伝えする楽しい機会でもあるのです。

私はそれが不正確であることを承知のうえで、「使節」という言葉を用いさせていただきましたが、ハーンがただの一度も公的な資格で「使節」であったことのないことは申すまでもありません。そしてまたローウェルも、アメリカで朝鮮の使節団を歓迎し、「隠者王国」とよばれていた朝鮮への初めての訪問者として敬意をもって処遇されておりますが、ローウェルもハーンも、その日本訪問は決して公的なものではなかったのであります。

それにも拘わらず、私は、この二人の旅行者を敢えて「使節」あるいは「文化使節」と考えさせていただきたいのです。そして明治時代に日本と外国を結んだこの二人を「文化使節」と位置づけさせていただく根拠について考えてみたいのであります。私はいま、知識としては知られていた古くして新しい世界と自ら進んで契約を交わした好奇心に満ちた探検家として、また知識と理解を

求めた人間として、彼らを「使節」という言葉を用いて表現しているのですが、彼らは、ある意味では、二重の意味での使節でありました。というのは、彼らは西洋から多くのものを持ち込んだだけでなく、その幅広い文筆活動によって、遠く離れた故国の人々に東洋の文化に対する目を開かせたからであります。しかしながら、申し上げるまでもなく、ハーンの果たした役割はこれに止まらなかったのであります。彼は、海とか国境とかだけでなく、時代を超えて語りかける、次元の高いすぐれた使節でありました。

まずここで、この二人の使節の生涯についてその概略を申し上げたいと思います。その同僚や同胞とも違っていったように、これらの両人はその相互の違いによっても我々の注目に値します。ハーンはローウェルの『極東の魂』(1888年)を読んでおりましたし、ローウェルもまた、敬意と称賛の念をもってハーンの世界を読みました。彼らは、有名な『日本事物誌』の著者であるイギリス人学者バジル・ホール・チェンバレン教授の紹介によって熊本で出会っていますが、それはただ一度の出会いにすぎませんでした。このチェンバレン氏は、東京帝国大学の日本語学の教授となった人物であります。ハーンとローウェルの両者に対し、無批判的とは言わないまでも、実に好意的な関心を寄せた人物でありました。

周知の通り、ラフカディオ・ハーンはアイルランド系イギリス人を父親とし、正規の教育を受けていないギリシア人女性を母親として生まれました。その後、彼は、ダブリンの比較的裕福な家に育ち、イギリスとフランスの双方で学校教育を受け、19歳のときにわずかにポケットマネー程度の金を手にしてアメリカに移住しています。容易に予想されるように、アメリカでの彼の生活は実に厳しいものであります。貧困から雑誌記者としてある水準まで伸し上がり、かと思えば、せつかく築きあげたもののすべてを投げ捨て、再び新たな土地で裸一貫からやり直すということの繰り返しでした。——それはシンシナティ、ニューオーリンズ、ニューヨーク、フランス領西インド、フィラデルフィア、そして再びニューヨークへと各地を転々とする生活でありました。

日本に来るまでのハーンは、次第に民族的特質とその差異に惹かれながら、グロテスクにして陰鬱な性格の物語りに彼独特の見解を加味するといったかたちの、特異な文筆活動を行なっていました。この間ハーンは、ハーバート・スペンサーの哲学を、民族と宗教に関する自分自身の情熱的思考に調和させようと努めていました。彼はまた、『Chita』とか『Youma』といった疑似小説を書いたり、フランス語の書物を翻訳したりしながら、「東洋」への興味を膨らませつつ、読書にふけていました。ギリシア人として生まれたためか、彼はアジアを故郷のように思い、次第にアジア志向的となっていくと言えましょう。1890年の春、日本に赴く機会を得たハーンは、この人生最後の航海に旅立ったのであります。しかしながら、日本でもまた、ハーン独特の気紛れと移り気が始まったのであります。東京——松江——熊本——神戸——そして最後に再び東京へと戻って行くのでした。これこそ彼の本来的気質を示すものではないでしょうか？

今年我々は、極度に目が悪くなったために再びまた他の地に移ることを余儀なくされるまでのしばらくの間、神戸で極めてすばらしい一時を過ごすことになったハーンの、来神百周年を記念する年を迎えています。彼が、その第3作である『心』を執筆したのも、神戸松蔭女子学院大学の真貝義五郎教授が見事にまとめられました『ラフカディオ・ハーン 神戸クロニクル論説集』に見られる彼の非凡なジャーナリストとしての文筆活動もまたこの神戸の地でなし遂げられたのであります。

これに反して、パーシヴァル・ローウェルの生涯は、ハーンのそれとは極めて対照的でありました。ハーンと違ってローウェルは、ボストンの名家の出身で、詩人となった妹のエイミー・ローウェルの日本に対する知的興味も、実は彼から受けたものであると言われますし、ローウェルの家系は何世代にもわたって文化人・有名人を輩出した家系でありました。もう一つローウェルがハーンと異なるのは、ローウェルがハーバード大学を科学と数学に関して素晴らしい成績をあげて卒業していることからわかるように、当時としては最高水準

の正規教育を受けていることであります。彼は、大学卒業後、中国や韓国を訪れ、日本にも滞在しました。ハーンはローウェルを、「素晴らしい才能と、力と、若さと、そして富に恵まれた人物」と表現しています。事実、彼は、東洋を何度も訪れることが出来、雑文を書く仕事などに煩わされることなく、自分の好むものだけを書いておればよいというふうに経済的にも恵まれていたのです。

要するに、ローウェルは、資力にも、地位にも、教育にも恵まれていました。しかしそれより何よりも、文化使節にとってはそれ以上に貴重な資質を有していたのであります。すなわち、彼は、アジアの幾つかの言語を身につけることが出来たのであります。ところが、ハーンは、十分な日本語能力を身につけることができませんでした。ただ、ローウェルの来日が若き日のことであったのに反して、ハーンはすでに中年になってからのことであったということを斟酌する必要があります。もっとも、この点に関して、果たしてローウェルが、その言語的能力の故にハーン以上に深くアジアを経験することが出来たかどうか、あるいはハーンが日本語学習に熱を入れなかったことがわざとのものであった、すなわちそこまで日本にのめり込むことの結果を恐れたがためであったのかは、大いに議論の余地のあるところでありましょう。このことについては、後ほど再び触れたいと思います。

ローウェルは、朝鮮に関しては『Chosun』、日本に関しては『能登』、『オカルト的日本』、そして彼の代表作である『極東の魂』等々、東洋に関する一連の著作の執筆後、180度の方向転換を果たした人物であります。1890年代の初めにアメリカ合衆国に帰国した彼は、科学に対する若いころの情熱を再燃させ、天文学者となり、特に火星の研究で有名となっています。アリゾナ州のローウェル天体観測所は彼の創設(1894年)になるものであり、そしてその研究員たちは、ローウェルの計算のお蔭で冥王星を発見することとなるのであります。言葉を換えて言えば、ローウェルはアジアの専門家としてその生涯を始め、ハーンはその生涯の最終段階においてアジアに目を向けたとも言うことが出来るのではないのでしょうか？

さて、以下において、明治日本にやって来た文化使節としてのハーンとローウェルについて考えて見たいと思うのであります。

私は、使節 (Ambassador) という言葉を、ローウェルやハーンと同時代の人間であったヘンリー・ジェームズなら定義したであろうという観点から、観察力にすぐれた人物として考えてみたいと思うのであります。私は、ポール・マレーや平川教授の、ハーンがギリシア的でありイギリス的であるとともに充分にアイルランド的であるという見解を否定するものではありませんが、それでも彼がその気質においてアメリカ人であったと考えたいのであります。ハーンは、日本でよりもアメリカで長く生活しアメリカで成人した人間であります。アメリカ人としてのハーンやローウェルは、明治維新の前年にヘンリー・ジェームズが砲艦や帝国主義とは全く異なったものとして捉えていたアメリカ文化の潜在的可能性を具現化していた人物ではなかったでしょうか？

〔ヘンリー・ジェームズは次のように言っているのです〕 アメリカ人であるということは、文化に対してすでにすぐれた心構えが出来ているということであると思う。民族的特性を持たないということはこれまでは嘆かわしいことであり不利なことであるとされてきたが、私はアメリカ人作家が、世界の様々な国々の知性の融合とその統合こそ我々がこれまで見てきた成果の何物よりも重要である、と指摘するかも知れないということがあり得ないことではないと考えるのである。

と。

ヘンリー・ジェームズは、アメリカ人の心の空虚さについての自分の若い頃の樂觀論を後年になって否定するのです。すなわち、後年彼は、アメリカ人のもつ潜在的可能性よりもむしろその空虚さを強調するようになったのであります。ローウェルの主張には、事実そこに一つのはっきりとした国民的性格が見られたのであり、彼は確固たる価値観をもって日本にやって来たのであります。そこで、私はいま、空虚というよりも感受性ということを念頭において、ヘンリー・ジェームズの用語を気楽に用いさせてもらっているわけであります。

ローウェルは、自分の価値観に確信を抱いており、それが日本人の価値観とは正反対のものであると考えていました。そして、彼の求めたのは、自分を日本の文化と融合させることではなく、自分の物の見方を確立することでありました。彼はいわば特権階級の人間のもつ西欧的権威と価値観をもって日本へやって来ました。しかし彼は、その人生哲学だけでなく、人生についての自分自身の定義そのものを検証しようと決意して来日したのでした。

「転々と居所を変えてきた」といわれる40歳の男としてのハーンが、ヘンリー・ジェイムズの言う文化的受容という尺度にぴったりと合っていたかどうかは簡単には答えられない問題であります。彼が有していた教養ならびに性格は、彼が1890年4月に横浜に上陸したとき携えてきた2つのスーツケースに入りきれないほどのものでありました。また、彼がハーバート・スペンサーから受けていた教養は、彼にとって実に大きな重荷であったに違いありません。

ここで私は、このことから、ローウェルとハーンが、補完的な物の見方、とりわけ文化的関係について独自に物を考える手段を日本に持ち込んだということ論じたいと思うのであります。両人は全く違った異文化を理解するのに必要な稀な洞察力と、彼ら自身の、恐らくは特異ではあるが貴重にして素晴らしい、融合能力の持ち主として日本に到着したのであります。

有能な文化使節は、ジャーナリストが見落とし、学者たちがまだ気付きもしていないことに気付くものであります。同時に、使節は、その出身国の価値観と任地の価値観の両者を代表するものであります。我々は、そのような人物に対して、どのような個人的才能を期待するのでしょうか？ ハーンとローウェルの素晴らしい生涯を特徴づけたものは、一体何だったのでしょうか？ このあとしばらくのあいだ、最終的にはハーンに焦点を当てつつ、議論というよりはむしろ問題提起のかたちで、この二人の人物について皆様とともに考えてみたいと思うのであります。

これら二人の日本研究者、日本人の生活についての観察者たちの資質を考えると、彼らと同時代の人物であるヘンリー・ジェイムズの言葉をもう一度ここに引用したいと思うのです。「よそ者がよそ者としてその存在を認めてもらうためには、彼はその全人格をもってそれをあがなうだけの心構えが必要である」と、人生の大半を国外で過ごしたこの人物は言うのであります。もっとも、ラフカディオ・ハーンには、自分自身の肉体以外にはあがなうべき手段は何も持っていなかったと言うこともできるでしょう。事実、彼は、お金も、財産も、何の当てもなしに日本に上陸したのでした。

パーシヴァル・ローウェルは、ハーンと違った方法でこれをあがなったのでした。ハーンが気付くことを避けようとした日本の諸相から自分自身の目を閉ざそうとする傾向があったのに対して、ローウェルは肉体的な挑戦を行なったのです。この意味においてローウェルは、同じ時期にただ一人の不確かなガイドを連れて、遠く離れた北海道にまで足を伸ばして日本を探検した男勝りの英国人女性イザベル・パードに非常によく似ていると言えましょう。日本を横断し、冬山で何週間も過ごしたローウェルの『能登』の記述は、彼自身がその全人格をもってあがなう心準備ができていたことを証明しています。いかなる肉体的犠牲が要求されようとも、彼は喜んでその挑戦を受け入れたのであります。

それとは対照的に、我々は『異国情緒と回顧』のなかに見られる、ハーンの富士登山についての苦渋に満ちた記述を思い出すのです。そこでは、耐えられないような懸念、すなわちこの神聖な山を事実上自分を支配しようとする魔性の女になぞらえ、大胆な言葉でもってこれを描写する心構えが出来ていたことを物語っています。また、水泳ということになると、ハーンは大胆さにかけては非常な評判を博していました。彼は、出雲の海岸から、そして後には焼津の海岸から危険を顧みず沖合へ泳ぎ出してみたりしているのです。全人格をもってあがなう心の準備が出来ていたことでは、彼は肉体とは関係の少ないところでも極限的な経験をもしているのです。すなわち彼は、横浜に到着してすぐ、もう一つのきずな——自分と過去との結びつき——との断絶を宣言しているの

です。彼は、金も職業も何の見込みもなく、更にはまたアメリカに戻るための船賃もないという極限状態に自分をおいたのです。彼が後にイギリス市民権を放棄して、小泉セツの家族に対する責任を引き受けたときにも、彼は再び自分の力でこれをあがなったのであります。日本についての愛憎のなかでハーンは、いつでも日本を去ることができる状態にあったローウェル以上に苦しんだことは確かであります。ハーンのこの苦悩の一部には、日本における責任と日本の持つ魅力と、カリブ海の熱帯的気候や他の西欧世界の諸相に対する憧れとの葛藤が入り乱れていました。そして、それらの西洋世界の中には時として、神戸やその他の条約港が含まれるのでした。

彼らのあがなう心準備が、おたがいにどれほど異質のものであったにせよ、ヘンリー・ジェームズの言葉が、半分だけ正しかったというのが真実ではないでしょうか？ 文化使節であるためには、またある外国の文化をただ外面的だけでなくこれをとことん細部まで知り尽くしこれを経験するためには、明らかに自ら進んでこれをあがなわなければなりません。ここで、我々は、どんな外国にあっても、「居心地のよい客人」という段階を越えてその外国文化にのめり込むことが出来るかどうかという問題を考えてみる必要があるのではないのでしょうか？ 小泉八雲は、果たして本当の意味で日本人になり得たのでしょうか？ 日本人に共感したと言いますが、果たして彼は、日本人の風俗や習慣やその生活に限りなく近付いて行けたのでしょうか？ 私は、もちろん、そのようなことはできなかった思うのです。と言うのは、人間の氏索性（アイデンティティー——Identity）といったものは、いわば文化的遺産であり、物の見方、バランス感覚の根源であるというパラドックスが残るからです。仮に可能であるとして、このアイデンティティーを放棄することは、旅人であれ文化使節であれ、新鮮な視野に立って物を見る力を失わせてしまうことにはならないのでしょうか？ 「自我の形成」についてのハーンの自問自答がこの間の事情を物語っています。彼は、日本人の集団意識とは対照的な西欧人の個人主義的性格が、西欧人にありがちな利己的な態度と他の文化に対する盲目的態度を生み出していると考えていました。結局、「絶対的な個性など有り得ない。民族の心と

「いうものは、肉体が細胞の集合であるように、一人ひとりの人間の魂の集合なのだから」と彼は言うのであります。このことは、彼自身の知覚は必然的かつ本質的に西欧的であり、そのアイデンティティーすなわち西欧人としての氏素性を捨てるということは、日本人になることではなく日本人を真似ることにすぎないのだ、という彼の事実認識を妨げるものではありませんでした。更に、我々がどれほど他国の文化に没入すべく努力しようと、また如何なる犠牲を払おうとも、完全に外国文化を理解することは出来ないということになるのです。

ローウェルとハーンの両人が、その限界を知りながら、犠牲の必要性を理解していたことは十分あり得ることです。そして、そのことを知るが故にハーンは、恐らく最大のあがないを必要としたのです。私は、ハーンが戦い続けた失意と落胆との戦いを言っているのであります。彼は、自分には日本を「理解する」ことなどとても出来ないこと、これを裏返しにして言うと、自分が称賛する国の人間になり切ることに情緒的に割り切れないものを感じていたという、もう一つの側面を繰り返し指摘しているのです。ハーンの手紙のほとんどに見られるこの矛盾する感情は、もう少し控え目で微妙な表現であるとしても、公にされている彼の著作の全体を通じて十分に見られるのです。

「横浜にて」(ハーンの第2冊目の著書である『東の国から』所収)のようなエッセイは、彼の抱いていた望みと期待が崩れ去ったことを裏付けるものであります。初期の熱狂は、失敗を繰り返すうちにだんだんと萎んでいき、そして非常に望ましくかつ知的に理解できると思われていたものも、まるで蜃気楼のように遠くの彼方に消え去ってしまったのであります。「横浜にて」は、ハーンが日本の仏教の教えについて詳しく知れば知るほど、それが我が身の不安定さを実感させるだけであったことを示しています。それどころか、この幻滅は絶望へとつながっていくのでした。「私は、考え得ざることを考え始めていました」と彼は言うのです。そして、この考え得ざることからこそは仏教の本質であり、人生についての疑問とそれについての回答——なかならず西欧式の理解は結局は虚しいものであるだけでなく、日本の風俗習慣に関する彼自身の解釈もしよ

せんは幻影にすぎないことを彼は知るのでした。

決してピエール・ロティのように皮肉な目で物事を見る人間ではなかったハーンには、ローウェルのように他人との間に情緒的な間隔を保つという余裕もありませんでした。彼は地震や他の自然災害の恐ろしい気紛れと同様のものと認識したものにも似た心理状態——気分の移ろい——をもってこれをあがなったのでした。そして彼は、そのすべてを日本芸術の儂さに結び付けているのです。

〔彼は言う〕大地そのものも儂いものである。川はその流れを変え、海岸はその輪郭を変え、平原もその高度を変える。火山の頂も時には噴火し、時には砕ける。溪谷は、溶岩や地滑りによって閉ざされ、湖も現れたり消えていったりする。……非常に美しい風景でさえ、ほとんどは錯覚——色が変わっていく美しさや霧の動いてくる美しさのもつ錯覚に過ぎない。日本の芸術でさえも、仏教によって創造されたものではないにしても、その影響のもとで発達したものであるがゆえに、そこには無常感の痕跡を残している。仏教は、自然は夢であり、錯覚であり、一連の幻想であると教えているのです。しかし、仏教はまたその束の間の幻想を捉え、至高の真実に関してそれをどのように理解したらよいかということもまた教えているのです。

このことは、いわば日本で生活する上での秘訣であり、ハーンが自分の生き方も含めてそのことについて深く理解していたことを示すものであります。そのような洞察が、彼をローウェルのような観察者とは異質なものとしているのです。しかしながら、自分を完全に他の文化に同化させるのは不可能であるために、ハーンの日本における生き方は、彼の文筆方法——例えば彼の人生観に見られるような一貫性、そして時々日本人の動機や諸制度や社会的営みについての過度に寛大な立場に引き続き反映されることになるのです。

もし、一人の文化使節が直面する計り知れない大きな問題の存在することを認めるなら、我々は、ハーンとローウェルが、予期以上のものを成し遂げたことを彼らの大きな功績として讃えなければならぬでありましょう。ローウェ

ルが日本的なもののすべてのサカサマ感覚を、機知に富んだ、しかしこれを弁護する気持ちで『極東の魂』を書きはじめたとき、彼は使節としての、また作家としてのスタンスを前面的にかつ明確に打ち出していました。以下に、ローウェルのことばを引用いたしましょう。

我々の地球の反対側では、すべての物が必然的にサカサマになっているはずだという子供のときの思い込みが、大人となって横浜に足を踏み入れた時に突如として蘇ってきた。仮に最初にちらっと見た時には東洋の人びとは決して頭を下にしてサカサマに立ってなどいなかったにせよ、少なくとも彼らが実に突飛な観点から世の中を見ていることは明らかであった。と言うのも、彼にとっては、彼らはすべてのものをサカサマ感覚で見ているように思えたからである。

ここに好意的な読者を意識し、その土地の人間におもね、彼らを喜ばせようとしている作家の姿が目につかんでくる。ここにはまた、ルイス・キャロルの作品を読み、ミカドの日本をますます奇妙に感じている作家像があります。全盛期のハーンには滅多に見られない二者択一の気風が、ローウェルのほとんどの作品の特色となっており、よく似た考え方が、『オカルト的日本』にも見られるのです。そこでは、ローウェルは日本の宗教儀式を、それこそ西欧の商業主義の産物である曲芸に類する、本質的に不健全なものと考えているのです。ローウェルは、このように、彼の興味をそそった日本の諸制度を一貫して軽んじているのです。彼は、自分自身そして彼の読者に、自分を取り囲んでいるものの美徳や美しさに関係なく、自分自身の文化の優越性を証明することに余念がなかったようであります。歴史でさえも、彼は、西洋の歴史を重視しました。結局、ローウェルにとっては、日本社会は崩壊すべく運命付けられていたのです。と言うのも、日本社会は西欧の進化の法則を受け入れようとしないからです。彼の言によると、日本は子供じみた時代錯誤に陥っており、それ自身の歴史の中で身動きがつかなくなっているのです。確かに、日本文明は多くの点において我々の文明に匹敵するものを持っている。それにも拘らず日本文明の中に部分的に発展が止まってしまっている興味あるケースを見るのです……。

ローウェルの観点からすると、物真似がうまく、非科学的であり、多くの点において子供じみており、彼ら自身の歴史的しがらみに身動きが取れなくなっている国民(日本人)より、「我々」(西洋人)の方が優れているということになるのです。ハーンと違ってローウェルは、日本人の強さとか、新しい時代に適應できる日本人の能力に気づいていなかったのです。もし時間的余裕があれば、基本的な人種の特徴についてのハーンの理論、すなわちそれが歴史的・文化的慣習に与える影響についてハーンがどう考えていたかを考察してみたいところですが、本日は時間的にそれが許されないのが残念です。例えば彼は、多くの場合、同じ実例を用いそれをただ逆の観点から見ることによって、ローウェルのような人間が未熟な発展としか考えなかった事柄を讃えたのでありました。

『極東の魂』におけるローウェルの立場のあるものは、もしそれが彼の持つすべてであるとするならば、典型的な植民地主義的レトリックであるように見えるでしょう。真実は、そのようなレッテルを貼ることは、ちょうど如何なる人間の物の見方も人間の愚考を見落とし、我々が知らず知らずのうちに形成してしまっている愚かな考えを許してしまうように、雑駁で、誤解を招くことになる傾向があるということでもあります。イギリス人として心の底では熱狂的な愛国主義者であったバジル・ホール・チェンバレンのように、ローウェルはその教育とその気質を反映した物の見方を堅持したのでありますが、その両方ともが彼の視野を制限したのでした。しかし、それは仕方のないことではなかったでしょうか？ ハーンは、日本に居を定め、出来るだけ日本人として生きることを選びましたが、ローウェルの、より距離をおいた権威主義的な態度にもそれなりの利点があったというのが私の見解であります。そのことによってローウェルは、日本と西欧を比較可能な位置——「双面的」とも言える位置に置いたことになります。ローウェルの偏見は正真正銘のものでありました。ハーンとは対照的に、彼は個人的な手紙においては機知やユーモアは言うに及ばず、批判を控えはしませんでした。ローウェルの文章は、芸術家、すなわち必要とあらばそれ相応の差別だてを示したヘンリー・ジェームズの作品に見られ

るような、最高の文化使節としての姿勢を示していると言え、言い過ぎでしょうか？ 真実のものであるかあるいは見せ掛けのものであるかは別として、——これはハーン自身も認めていることなのですが、彼(ローウェル)の権威は恣意的な観点と同時に大胆な提示を示しているのです。

ところで、一つこのあたりで、ローウェルとハーンの観点をひっくり返して見ようではありませんか？ ローウェルの権威はそれ自体が仮面ではなかったのでしょうか？ すなわち、自分の価値観が非難されたり、ひっくり返されたりした人間の開き直りではなかったのでしょうか？ 期待とはあまりにもかけ離れた文化に圧倒された人間の驚愕の表れではなかったのでしょうか？ ところが、ローウェルが間もなく探検することになる新しい宇宙世界は、彼に対して話しかけたり、彼が日本で見つけたかも知れない脅威的な情報を与えたりするようには思えなかったのです。

もし、このような推測が一つでも当たっているというなら、ときどき言われるように、ハーンの日本人として生活していこうとする心の準備をハーンの弱さあるいは無防備としてではなく、ローウェルを遙かに越える力として考えることが出来るのではないのでしょうか？ ハーンが知的に仏教を是認したことで、恐らく彼にはこのような姿勢を受け入れる能力ができたのでありましょう。もう少し深くこの問題に近づくためにも、伝統的であり必ずしも誤ったものとは言えない、ハーンの強さについての評価をもう一度ここで再検討して見ようではありませんか？

これで、ハーンが、文化使節として極めて質の高い資質を持っていたことがお判りになると思うのであります。

先ず、第1に、ハーンは日本で現実に生活することによって、神戸のような港町以外の日本をもよく知っていました。しかも誰よりも以上に彼は、日本が如何に外部の世界から隔絶しているか、如何に外部の世界とは異質な存在であ

るかということも知悉しておりました。そしてハーンは、このような日本を、幻想のミカドの国以上のものとして賞賛していたのであります。彼は『心』のなかで、次のように述べているのです。

私の家の2階のバルコニーから、日本の街の表情がよく見えます。ここからずっと港の方まで、小さな店々が並んでいる街の表情が見えるのです。そして、その通りの家々から、コレラ患者たちが病院に運び出されて行く姿が見えるのです。たった今朝ほども、通りの向こうの瀬戸物屋の主人が、家族の者たちが涙を流して泣き叫ぶなかを、無理やりに病院に連れて行かれるのを見たところでした。

このようにすぐれた観点から日本のことを書ける西洋人が果してハーン以外にいたでしょうか？ しかし彼は、「コレラの流行期に」の文章を、感情を抑えた淡々とした筆致で書き始めているのです。ハーンはしばしばその変化に富んだ筆致の故に賞讃される作家であります。ここに見られるハーンの筆致は、まさにそのような賞讃を越えるものであると言うべきではないでしょうか？

第2は、——まさに上で見た文章から明らかなように——ハーンが物事の印象を実に上手に受け止め、これを人を引き付ける素晴らしい文章にまとめる資質に恵まれていたということでもあります。アメリカの哲学者であり、ヘンリー・ジェームズの兄であった心理学者のウィリアム・ジェームズは、「真理はアイデアを引き出す」と言っていますが、ハーンがニューオーリンズの万国博覧会で受け、その後の絶えざる読書によって得た漠然とした東洋への憧れは、当地日本において見事な花を咲かせることとなったのであります。まことに奇妙なことながら、ハーンは自分の携えてきた文化的受容の受皿のなかに、日本の文化を受け入れることに見事に成功しているのであります。

第3は、世上報道されている以上に、彼は自分の価値判断を入れることの少ない作家でありました。日本に絶望して陰鬱な日々を送っていた時でさえ、彼は率直さと寛容の精神をもって、孜孜として文筆活動にいそしんだのであります。ポール・マレーも指摘するように、『知られざる日本の面影』を書き始めた

ときの情熱的な印象は、その最初の情熱が少し衰えた落胆の時代に書かれたものでありました。詩人J・キーツの言葉を引用すると——ハーンは一種のカメレオンのように自分の感性のままに生きた人物でありました。それはローウェルのような人物にとっては必要であったような価値判断を避けつつ、自分の真実に生きた人物ということができましよう。我々は今、個性について、詩論について、そして階級に関するハーンの考え方について語っているのであります。

ハーンの日本語の著作には、私の考えでは等しく重要と思えるもう一つの力強さがあります。それについて議論するためには、我々は言語の問題についてもう一度考えてみる必要がありそうです。流暢に日本語の話せたローウェルとは違って格段に日本語が下手であったハーンが、どうしてローウェル以上に日本を理解することができたのでしょうか？ これこそ正に大きな矛盾ではないのでしょうか？ ここで、今世紀初頭のフランス文化についてのガートルード・スタインの風変わりな接近方法を思い出していただきたいのです。と言うのは、私は、正にこのような姿勢がハーンの立場に何らかの影響を与えていると思うからなのです。彼女は、英語で書くことを欲し、新しいアメリカ英語を創造したいと念じていたために、パリに住んでいる間もフランス語を話すことを拒否したのです。言語というものは、ある意味で、その人物のアイデンティティーを示すものであり、特に文筆家にとってそれは避けることのできないものがあります。そしてスタインは、不評を買い、そして不条理でさえあるこのような原理原則のために一生懸命努力したのです。

ハーンのフランス語は、ゴーティエやロティの作品の翻訳には充分であったかもしれませんが、恐らく彼は、パリでのガートルード・スタインと同じ立場におかれても、立派にやっていけたことでありましよう。ハーンの子語の能力についての解釈には様々な対立した意見があるものの、彼自身やほとんどのハーンの観察者の判定では、彼の日本語はとても物の役には立たない程度のものでした。彼が日本について書くときに、彼はローウェルのような人物が試みなかった、その文中に日本語の単語を散りばめ、それによって日本語の感覚を盛

り込むことが出来たことを我々はどのように解釈すればよいのでしょうか？ 今日、アメリカでは、ラテン系アメリカ人作家たちが、これと類似の自意識をもって同じ手法を用い、彼ら独特の言語をスパングリッシュと呼んでいます。彼らの目的は、ハーンの意図したのと同じように、部外者に言語を文化としてその内面から理解させようとし——そして読者の期待をサカサマにすることにあります。チェンバレンは、悪い習慣と思えたこのような手法をハーンに捨てさせようと努めました。ところが、ハーンにとっては、日本語の幻想が現実にとって代わり、恐らく英語の単語を使っただけでは出来なかったであろう、日本にいるという実存感覚を喚起しようとしたのではないのでしょうか？

これは単なる推測としか言えませんが、ハーンが意識的あるいは無意識的に日本語を学ばないという決心をし、きっと彼が好んだであろう類比を用いると——ちょうど浦島が行なったような思い切った行動、死と切り離すことのできないような没入をしなかったのであります。我々がアイデンティティーというものを文化的に捉えるにせよ個人的に捉えるにせよ、あるいは人間の存在に不可欠な幻影と考えるにせよ、あるいはロラン・バルトが示唆しているように、記号の函数と見るにせよ、あるいは人間の存在に不可欠な幻影と考えるにせよ、言語的なアイデンティティーは、文化的なアイデンティティーと同様に、基本的なところで我々に迫って来るのです。と言うのは、同時代の英国人の多くにとってと同様に、ハーンにとって言語と記憶は自分の氏素性の認識にとって切り離せない要素なのであります。

文化使節としてのハーンの偉大な才能の秘訣の一つは、言語がその鍵でありその根源であるという、この自意識との格闘でありました。ローウェル以上にハーンは、日本について書く条件として、日本に溶け込んで生活するということに努力しました。仮にハーンが、ローウェルの方がずっと優れていた言語についてイマジネーションを働かせたにすぎないとしても、彼の想像力はローウェル以上に遠くまで広がり、同時にもっと大きなリスクに直面していたのであります。私は、ローウェルの言語の才能が彼に文化的な象徴を見落とさせたの

ではないかと考えているのです。我々はこのことを考えながら、再びハーンに立ち帰り、彼の日本理解の複雑さを考えてみたいと思うのです。

ハーンと日本語との関係は、次に指摘するポイントと直接関係しているのですが、これを理解していただくことによって私の問題提起がはっきりすることでありましょう。もし我々が、ハーンが日本や日本文化についての好意的なものを持ちながら、しばしば西洋文学が日本のそれよりも優れているなどと話していたことを思い出すなら、我々は一つの矛盾を感じずるのです。彼が如何に、彼の学生たちに対して、彼ら自身の遺産すなわち日本の文物を尊重し、新しい日本文学を創造することを勧めたとしても、ある意味において彼は文学の序列について偏見を持っていたと言えます。あるいは彼は、日本文学の欠陥を見て、ハーバート・スペンサーやパーシヴァル・ローウェルが考えたように、文学の伝統についての進化論を信じていたのでしょうか？ しかし彼は、それが彼の妻が日本の民話を口頭で伝えたものであったとしても、ともかく彼は日本の民話を見事なかたちで再話創作したのであった。

ここで私は、ハーンの日本に関する著作を、このような限定的意味ではなく、彼の同時代人との決定的な訣別として、また日本に近づくための革新的な手段として考えることを皆さまに求めたいのです。彼がその作品のなかに日本語の単語を散りばめるという手法を用いたことは、ここでは決定的であり、彼の意図を明確に示しています。この意味で、ハーン自身の著述は、如何なるものであれ、当時の伝統的な西洋の作品のカテゴリーには馴染まないものなのです。それは魚でもなければ鳥でもなく、小説でもなければ詩でもなく、自叙伝としてさえも認知できるものではないのです。むしろ『心』の副題にあるように、日本人の内面生活についてのヒントと反響とすべきでありましょう。しかも『日本、一つの解釈の試み』を部分的に除外するなら、それは、ハーンが——西洋文学の優越性を主張しながらも——東京大学の学生たちにその質を高めるようにと勧めていた日本文学の文学様式に似ていたと言えます。

英語で書かれたこのような作品は、今日の文学批評という眼で見たとしても、二流もしくはピントはずれのそしりを受けることでありましょう。事実、アフリカの口頭伝承文学にしる12世紀の日本の説話文学にしる、世界の文学はほとんど同じような意味合いを持っているのです。我々はハーンの著作を、戯作の一つの型、あるいはその後の小説、すなわち伝統的に非連続性やその幅の広さ、挿話的構成を強調してきた作品の一つの変形と見ることはできないでしょうか？ 現代小説の手法はしばしば1890年に始まるとされますが、奇しくもこれはハーンの本邦到着の時期と一致するのです。少なくとも夏目漱石によって書かれたこのジャンルの作品の一つは、ハーンの『心』と同じ表題となっているではありませんか。

私は、ハーン自身が、少なくとも意識的に、日本の散文の手法を真似るつもりであったと言うつもりは毛頭ありません。事実、西洋の作品にも彼の手法の先例が見られるのです。ただ私は、彼が西洋人としてはただ一人、日本の小説手法を直感的に理解し、日本人の思考方式を理解していた人物ではなかったかと申し上げたいのであります。またその結果、日本語の機能的な面白さを理解できたのです。彼が日本語についての系統的知識の欠如として後ろめたく感じていたことが、却って彼の才能を扶ける力となったのであります。その意味で我々は今、日本人の生活に関する限り、これについて何も知らない観察者について話しているのではないのです。ローウェルやチェンバレンよりもずっと優れた日本理解をもっていた作家について語っているのであります。日本人作家と同様、ハーンは日本人の作家が小さいことについては宝石を扱うような正確さを大切にすることを除いて、物語の統一性や文学的一貫性などについては少しも気にしなかったのです。彼は、手本にした日本人の作品に勝るとも劣らず、はっきりと認識したうえで、これをブレンドしたのでした。

さて、このあたりで、東洋を後にしてさっさとアメリカに戻り、180度の方向転換を遂げ自分自身の宇宙に入り込み、全く違った世界の研究すなわち星についての探求を始めたローウェルのことはこの辺りで終え、神戸におけるラフカ

ディオ・ハーンの文筆活動についてももう少し考えてみたいと思うのであります。すなわち、自分を茫然とさせた日本と取り組むために日本に滞在した、柔術の徒ラフカディオ・ハーンに焦点を当てたいと思うのです。——日本を離れることが出来なかったのか日本を離れることを選ばなかったのかはともかくとして——彼は、ローウェル、否、日本の印象を記録した他の多くの西洋人とは違ったかたちの文学的企てにその余生を捧げようとしたのです。

ハーンの神戸での著作を特徴づけ、彼の日本生活のこの危機的な年にこの書物を著したハーンを特色づけるのは何でしょうか？ 『心』を書いた時のハーンは、『知られざる日本の面影』を書いた時のハーンと同じ部類の文化使節だったのでしょうか？ この間に新しい発展はあったのでしょうか？ 当時にしる今日にしる、この書物の読者はどのような人物だったのでしょうか？ 1894年10月に、後に今日のように発展することとなった神戸という条約港に到着した時、ハーンはすでに2冊の書物『知られざる日本の面影』と『東の国から』とを著していました。

彼は教職という、彼にとっては新しい職業をしばらく放棄して、ジャーナリストとしての彼の本来の職業に立ち帰り、『神戸クロニクル』での仕事を受け入れたのです。ジャーナリストとしてのハーンの神戸での健筆は、日本の軍事力についての洞察的な論評から人力車の運賃にまで及んでいます。それは、ポストンやロンドンやベルリンの読者とは異なった期待を持っていた、日本における英字新聞の購読者を対象としたものでありました。ある意味では、1896年の『心』は、ハーンのジャーナリストへの復帰を反映しています。そこには、幾分はっきりとした政治がらみの論述も見られ、当時の時代的背景が反映されています。その中には、「門つけ」、「停車場にて」とか、いつもの日本の生活の諸相に触れたその他のハーンの随筆と並んで、「戦後」、「コレラの流行期に」、「旅行日誌より」といった作品が含まれています。その上、『心』は、ハーンが(ローウェル以上に)日本文明の核心的問題と呼んだものに触れているのです。

神戸でジャーナリストに復帰したハーンは、『心』のなかで、日本への闖入者、日本人の生活を学ぶ謙虚な徒弟としての「我々」についてしばしば触れています。かつては、この「我々」は、「主人風を吹かす人種」でもありました。アーネスト・フェロノサにとってと同様、ハーンの目には「極東のフランス」となる日本が写ったのでしょうか？ 他国と交戦中であり、国民的感情の高揚するなか、ハーンは狂信的愛国的西洋人ビジネスマンとは一線を画しておりました。それにも拘らず、彼は恰も自分がいまだに英国人であり、部外者であり、異邦人であり、日本人の評価では、他と変わらぬ外人の一人であるかの如く発言しているのです。そのような彼は、もはや松江に招かれ大事にされ特別扱いをしてもらっていた訪問者ではありませんでした。自分が日本人ではないという疎外感はまだ、日本滞在中の年月を通じてのハーンの著作のなかに何度も何度も現れてくるのです。それは社会的傾向というよりも精神面の傾向であったにも拘らず、『心』にとっては重要なことなのです。

『心』の大部分は、ハーンも言うように、物事のこころを中心に、日本人の外面的な生活よりもむしろ日本人の内面生活を扱っております。評論や覚え書きや日記や物語りを集めたもう一つの論集では、その焦点はジャーナリズムの別の面に置かれていましたが、それは限られた理解のかげに隠れた日本、彼の好意的な知性に訴え続ける日本でありました。東洋と西洋の相互反発の分析に焦点をおくことによって、ハーンは彼自身の仕事が基本的には不可能であることを再び強く訴えるのです。ハーンが日本文明の底流をなしているものと喝破した無常感の重要性についての、功罪相半ばする見方についてはすでに述べたところであります。彼はまた、遠い坂道を上る神社訪問を何処に行くものでもない道程、何にたどりつくでもない石段と言っているのですが、これは彼が、自分が生活することを選んだ国への讃辞であるとともに彼自身が行なおうとしている日本紹介ないし日本理解が、如何にちっぽけなことであるかということを確認していたことを示すものであります。

『心』に見られるこのような章句は（それらは彼の著作を通じてしばしば出

てくるのですが)、神戸での彼の著作が一貫して仏教との関連において書かれているということを示しています。それには「業」とか「阿弥陀寺院」についての一節が登場します。ある時点では、ハーンは仏典を引用して、「分別ある人間は自らの個性をもたずに物を見る」とまで言っているのであります。その作品が具体性に満ち、これをカメラによるように細部まで図式的に示すことで知られるハーンのような人物としては、何とも奇妙なコメントではないでしょうか？ ところが、そのような論調は、ハーンの思考方式に重要な影響を与えているのです。例えば、「きみ子」という物語では、ハーンはいかに例外的であれ、この女性の身の上が多く他の女性の典型であることを明らかにしているのであります。

〔彼は言う〕芸者屋町というものは、悲劇、喜劇、メロドラマを偲ばす様々な伝説に満ちている。そして全ての家にはその家独特の思い出がまつわっている……そしてそのなかには、とても恐ろしいものもある。初代きみ子の身の上はそれほど異常でもなく、それは西洋人にとっても最も理解しやすいものの一つである、と。

今こそ我々は、自分が身につけた知識を意図的に忘れること——彼の言葉を使うと **Unlearning** ——すなわち個性と特性への依存からの意識的脱却という叡智をもって、今一度ハーンの著作を再読する必要があるのではないのでしょうか？ あるいは、表現を換えて言えば、ハーンが日本で既知の知識を捨てたことが、彼を賞賛に値する報道記者とし、そして彼をば彼自身思いもかけなかった日本文化の理解者となることを可能ならしめたと言えるのではないのでしょうか？ 彼の人生における「空虚から受けた衝撃」は、彼の人生忘却の自覚、一方的な思い込みの破棄、如何なるものであれ我々が理解しようとする文化の理解だけではなく、我々自身が見ているものの影に隠された物の本質的把握と機を一にするものではないのでしょうか？ ハーンは日本にプラトンの「影」の理論を紹介しました。そして影・陰影・明暗といった言葉は、日本での彼の14年間の経験を通して、彼の自己認識の底流に流れているのです。

ここで皆さまは、ハーンが如何に固定観念的思考に反抗したか、お判りになったと思います。私は、彼とローウェルをこのような観点から採り上げたのです。すなわち、異なった経歴、異なった経済的背景を持った西洋人旅行者として、難しい日本語を媒体にして、ともに彼等の理解した日本をどうかして外国に伝えようと努力した人間として彼らを採り上げたいと思ったのであります。ローウェルにとっては、その手法は物事をサカサマという観点から見ることでした。すなわち、「我々は彼らの反対であり、彼らは何かにつけて我々とは反対なのだ」ということでした。（ここで私は、マサオ・ミヨシ（三好將雄）によって論じられた皮肉な対置法を使っているのです。）

ところが、ハーンにとっても、時折この種の修辞があったかも知れませんが、その表現はそれほど単純なものではなかったのであります。彼が認識したように、矛盾は外面的なものであるだけでなく内面的なものでもありました。国を捨て、まったく偶然に「アメリカ人」であったにすぎなかったハーンは、若いヘンリー・ジェイムズが新しい文明のための理想的な土地と見、今日的表現をすれば「多文化文明」と呼ばれるようなものを日本を媒体とした作品において具現化したのです。ハーンは西洋的思考という財産を日本に持ち込みながら、日本に住むことや教えることの特権と引換えにこれを気前よく捨てたのでした。これまで、自分の目で見ただものに対してこれほど誠実な文化使節が他にあったでしょうか？

私は、ハーンが日本の全てを見たと言主張しようとしているわけではありません。彼はしばしば彼を怒らせた日本の政府組織についてはほとんど何も知りませんでした。階級組織とか社会構造とかについては、彼が妻の偏見というレンズを通して聞いたり、日本語文献の限られた読書から得られたことから推測したにすぎません。

そろそろ、本日の結論へと急ぎたいと思います。私は皆様方に、ハーンを東洋から西洋への使節としてだけでなく、東洋から東洋への使節として見て欲

しいのです。それも西洋的視野をもって物事を見、彼が紹介に努めた文化について直感に近い洞察力をもってこれを伝えようとした使節として見て欲しいのです。ハーンが日本人にアピールするのは、彼がローウェルや彼の同時代の人びととは異なり、今日もなお依然として時間と空間を越えた文化使節であり続けていることによるのではないのでしょうか？

『知られざる日本の面影』、『東の国から』、『心』、あるいは『明暗』というタイトルのもとにまとめられている他のいくつかの小品に見られる文学の混合形式は、遠い昔に失われた良き時代の日本の美について、日本人に警鐘を鳴らすものではないのでしょうか？ これこそ、ハーンがこよなく愛し、ハーンがその喪失を嘆きつづけた世紀末・明治日本の面影ではなかったのでしょうか？

もし、ラフカディオ・ハーンも認識していたように、文化的な仲介者とか文化使節がこの不可能な仕事を立派に受け入れることができるものならば、我々が、ハーンの業績を讃えるために、今日このようにして神戸の土地に集う機会を得ることはなかったのではないのでしょうか？ 彼の業績は、決してきちんと組み立てられた権威主義的なローウェルのような労作ではありませんでした。しかしそれは、日本文化の脆さと無常感を高く評価し、彼自身の魔術師的な手法でそれを伝えた、ずっと次元の高い労作であったということができないのではないのでしょうか？

本稿は、1994年8月26日に、本学学術研究会主催の夏季公開講座の一環として行なわれた、小泉八雲来神百周年記念行事「ラフカディオ・ハーン in カンサイ」における、テラウェア大学英文学科主任教授（当時）カール・ドーソン教授の講演原稿である。もともと同教授は、米国における伝記作家の研究家であるが、ニューハンプシャー大学英文学科主任教授であった1989年度に、本学に交換教授として招聘され、それを機縁に、ハーン研究に手を染めた人物である。

著作は無数であるが、ハーン研究との関連では、英国から米国への移民としての自らの追憶をつづった「November 1948」(Virginia, 1990)と、「Lafcadio Hearn and the Vision of Japan」(Johns Hopkins Univ. Press, 1992)が特筆に値しよう。

本講演のタイトルとなった「文化使節」—— 原名 = Ambassadors —— の背景には、ヘンリー・ジェームズの *The Ambassadors* —— 邦訳 = 「使者たち」 —— があったと思われるが、本講演タイトルの邦訳としては、その内容・背景の違いを考えて、敢えて「文化使節」という訳語を採用した。

なお、講演という性格を考えて、他の一切の注釈を省略した。